第8回 三浦坂（台東区）

山野 勝 Yamano Masaru
坂道研究家

1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第３編集局長、取締役、常務取締役を務め、現在講談社顧問。この十数年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役に。『タモリの TOKYO 坂道美学入門』（講談社）に企画参加。著書に『江戸の坂――東京・歴史散歩ガイド』（朝日新聞社）がある。

台東区の谷中一丁目四と二丁目二の間を南西から北東に上る、美しくかつ江戸の風趣を残す坂がある。名前を「三浦坂」という。

坂上に向かうと、右側に臨江寺と宗善寺の高い石塀が続き、左側には民家が並び、坂上には堅固な石垣がある。坂の両脇からは樹林が枝を投げかけて、緑のトンネルを作っている。名坂の名に恥じない趣である。

坂名の由来は、二丁目側（左側）に三浦志摩守の下屋敷があったことに因む。三浦氏は美作国（岡山県北部）真島郡勝山の二万三千石の大名で、初めは勝山藩といったが、幕末慶応のころ、真島藩と改称した。

この下屋敷を拝領したときに、こんな逸話がある。寛永十（一六三三）年、三代将軍家光が王子村で狩りをしたとき手負いの猪に襲われた。そのとき、そばにいた三浦正次（初代藩主）がこの猪を瞬時に斬り殺した。この功績により、帰りがけに家光から谷中の当地を与えられたという。

別名を中坂という。これはこの坂が、善光寺坂と三崎坂の中間に位置しているためである。現在は三浦坂の西側に赤字坂があるが、この坂は明治時代にできた新坂である。

三浦坂の坂下には、かつて藍染川が流れていた。染井霊園付近を源流として不忍池に流入していた。現在は暗渠になっているが、西側に残る「へび道」にその面影がある。

坂上を左折し、一本目を左折すると「大名時計博物館」がある。今は個人の所有だが、ここが勝山藩の下屋敷跡だ。館内には櫓時計、枕時計、印籠時計など大名時計の名品が展示されていて、一見の価値がある。

坂上から見下ろす姿も美しい。

コラム坂 一服茶屋

渋谷区神宮前二丁目五と二の間に「勢揃坂」という坂がある。青山熊野神社と国学院高校の西脇を北へ緩やかに下っている。

坂名の由来はこうである。永保三（一〇八三）年の「後三年の役」のとき、奥州征伐に向かった八幡太郎（源）義家が、この坂で軍勢を揃えて出陣して行ったのでこの名がついたという。

徳川家康の江戸入府以前からある鎌倉街道・奥州街道の古道なのである。

三浦坂アクセス▶千代田線・根津駅１番出口を左折し、不忍通りを進む。「根津小入口」の信号を右折していくと坂下へ。徒歩７分。